「日々の理科」（第 790 号） 2016（H28),-9,-4

「ウシアブの攻撃」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

新学期が始まって、最初の金曜日に５年生の授業があった。私は長期休暇後の授業は、まず質問から受け付けることにしている。休み中に体験した、さまざまな科学的な質問が、子どもたちの頭の中に山積しているのだ。私もそれを聞くのが楽しみである。ある女児がこんな質問をした。

「家族で長野県を、車で旅行した時、牧場らへん（牧場の近く）の駐車場に停めたら、いきなりスズメバチっぽい虫が攻撃してきて、車のガラスにガンガン当たってきたんです。怖くて、降りられなくて、エンジンをかけたまんまにしてらた、どんどん仲間が増えて、窓にすごい勢いでぶつかってきました。結局、そのまま車で逃げました。あれって、やっぱ、スズメバチですか？」

答えのヒントは、常に子どもの言葉の中にある。だから、子どもの発言は、一字一句よく聞かなくてはいけない。「牧場の近く」「集団で車を攻撃」「スズメバチに似ている」「エンジンをかけたままにしたら、どんどん増えた」これらがキーワードだ。

これはスズメバチではなく「ウシアブ」という大型のアブである。名の通り、ウシなどの家畜の皮膚を刺して、血液を吸う昆虫である。アブ類（双翅目＝２枚翅）はスズメバチ（膜翅目＝４枚翅）とちがって、空中での停止飛行（ホバリング）が苦手なので、目標物に向って、ぶつかってくるような飛び方をする。下の写真は、私の車の周囲に群がるウシアブである。

ウシアブの仲間でも、特に「アカウシアブ」は、スズメバチと色・姿がよく似ている。車を停車させて、これに集団で囲まれて、ガラスにガンガン当たってきたら、知らない人なら、必ず恐怖を覚えるだろう。

ウシアブ類は、動物の呼気に含まれる二酸化炭素を感知して、獲物の位置を察知する。エンジンをかけたままの自動車に集まるのは、排気ガスが原因である。一度獲物（動物）と認識したアブの群は、執拗に攻撃し、自動車の車体からも吸血を試みる。無理してドアを開ければ、必ず車内に飛び込んで来る。車を囲まれた場合は、慌てずにエンジンを切って、しばらくそのままにしておけば、アブの群は去ってゆく。